

カラスがルリカケスになる話

鹿児島県立奄美高等学校二年

川畑 かわばた

結月 ゆづき

むかしむかし、いたずらが大好きなカラスがいました。せっかく植えた、たんかんの苗をすべて抜いてしまったり、時計草の種をすべてつついてダメにしてしまったり、村の人々や動物たちはとても困っていました。とくに困るいたずらが、クロウサギの子どもたちをだまして連れていくことでした。

「ぼくの体は、真っ黒でしょ？君たちの仲間だよ。」

クロウサギの子どもたちは、疑うことも知りません。カラスはまず、オットンガエルの住む大きな池にクロウサギの子どもたちを連れていきました。

「誰じゃ。わしの大きな池に無断で入るのは。」

オットンガエルのおじさんは怒りました。

「グウーグウー」という大きな鳴き声にクロウサギの子どもたちは、びっくりして腰を抜かしてしまいました。

カラスは、それを見て大笑いしています。

「すまん、すまん。場所を間違えた。」

そう言って、次に連れていったのは、大きなモダマの群生地です。足を踏み入れた瞬間、

「ここは、私たちの眠る場所よ。」

モダマの奥さんたちは口をそろえて言いました。そして、大きな豆をクロウサギの子どもたちに向かつてポンポンと落としました。クロウサギの子どもたちは、右へ左へピョンピョン逃げ回りました。それを見てカラスはまたまた、大笑いしています。

「すまん、すまん。今度こそたくさんの仲間に見える場所だ。」

連れてこられたのは、山の奥深く。リュウキュウオオコノハズクの鳴き声が遠くから聞こえてきます。さすがのクロウサギの子どもたちも怖くなって、

「ママの所へ帰りたい。」

と口々に言い始めました。

「実はママは、この森にいるんだよ。ほら、その穴だ」クロウサギの子どもたちは、大喜びで次々と穴の中へ入っていきました。

「誰だい。私の食事場に入ってきたのは。」

ニヨロニヨロと大きなハブがクロウサギの子どもたちをぐるりと囲いました。クロウサギの子どもたちは、あまりの恐ろしさに固まり、言葉も出せませんでした。カラスはカーカーと鳴きながら元の森へクロウサギの子どもたちを置いて帰っていきました。

「子どもたちい。どこにいるのお。」巣穴に戻ると子ども

もたちがいなくなっていたので、お母さんクロウサギは一生懸命、探していました。そこに、大慌てでやってきたのは、アカショウビンです。

「大変だ。恐ろしいハブのいる南の森に子どもたちが行ってしまった。」

アカショウビンから、すべてを聞いたクロウサギのお母さんは、

「助けなきゃ。」

と急いで出ていきました。アカショウビンから話を聞いた友達のトビンニヤ、オオシマトカゲ、シマイノシシも一緒に南の森に行くことを決めました。最初に出会ったのはオットンガエルのおじさんです。

「真っ黒なカラスがクロウサギの子どもたちを連れてきて、うるさかったぞ。」

そして、クロウサギの子どもたちが次に向かった所を教えてくださいました。次に出会ったのは、モダマの奥さんたちです。

「カラスとクロウサギの子どもたちが、私たちの眠っている所を邪魔したのよ。」

そう言って、次に向かった所を教えてくださいました。教えられた奥深くの山に入るとリュウキュウオオコノハズクの声が聞こえてきました。

「かわいそうな子どもたち。真っ黒カラスにだまされて

ハブの穴へ飛び込んで。」

目の前には、細くて暗い穴が空いていました。

「私に任せて。」

オオシマトカゲがキラキラと輝く虹色のしっぽを穴の前でパタパタとふるとズズツズツと穴の中から大きなハブが出てくる音が聞こえました。するどいキバをむき出しにしてオオシマトカゲにかみつこうとしたその時、トビンニヤ兄弟が飛び出しました。

「あいたたたた。」

トビンニヤ兄弟のかたい体に当たったハブのキバはポロリと落ちてしまいました。

「いまだあ。」

シマイノシシがすごいいきおいでハブに突進していききました。ハブは、おどろいてガジュマルの木の上に逃げていきました。

「子どもたち。ママよお。」

クロウサギのお母さんは穴に向かって何度もさげびしました。

「ママ、ママだ。」

穴の中からぞくぞくと子どもたちが飛び出してきました。

「カラスのお兄ちゃんが穴の中にママがいるって言ったの。」

その話を聞いてママはカンカンに怒りました。ガジュマルの木の上でその話を聞いていたハブも、

「こんなひどい目にあつたのも、全部カラスのせいか。」とカンカンに怒りました。そして、仲間にハブも加わり、みんなでカラスを反省させる作戦を立てました。何も知らないカラスはまたクロウサギの巣穴の前にやってきました。

「ぼくの体は、真っ黒でしょ？君たちの仲間だよ。」

と子どもたちに声をかけました。穴の中から

「もっと近くに来てくれないと、君の体は見えないよ。」

と声が聞こえました。カラスは巣穴の前で、

「君たちと同じ、真っ黒だよ。」

と声をかけました。すると、また穴の中から、

「後ろを向いてくれないと、しっぽも黒いか分からないよ。」

と声が聞こえてきました。カラスは巣穴に背を向けて得意げに羽を広げていました。

「ほらほら見てごらん。どっからどう見ても真っ黒のしっぽだ。」

その時です。真っ黒な巣穴から、するどいキバを持ったハブが飛び出し、真っ黒なしっぽにガブリとかみつきました。

「いたたたたた。」

カラスのしっぽはハブの毒が入って、どんどん紫色に変わり、体はどんどん熱くなり、おなかの周りは赤くなっ
ていきました。口ばしからは色が抜け落ち真っ白になりました。

「君の体は真っ黒じゃない。君はぼくたちの仲間じゃない。」

とクロウサギたちは口々に言いました。

それからカラスは体の色が変わり、

「ルリカケス。」

という新しい名前で心を入れ変え今でも

「ゴメ（ン）」「ゴメー（ン）。」

とあやまりながら鳴いているそうです。